

日本仏教心理学会 ニュースレター

Vol.25 2025 年 4 月 1 日

巻頭語

第16回日本仏教心理学会学術大会で実感した絆 千石 真理

第16回 学術大会より

1. 第16回学術大会を終えて 鈴木 康広
 2. 基調講演とディスカッションを聴いて 阿部 洋子
 3. 一般演題の発表を終えて:
 - 1) 「補遺としての『十界一如の義』考」 遠藤 健一郎
 - 2) 「研究発表で見たトランスパーソナルの世界」 矢野 恭治
 - 3) 「内観の方法と効果～仏教心理学的視点から～」 仁田 公子
 4. 大会の報告 松永 博子
 5. 2024 年度の研究会活動報告/講習会と分科会
—2024 年度報告と 2025 年度ご案内— ケネス 田中
 6. 2024 年度の分科会活動の報告:
 - 1) 歴史分科会 岩瀬 真寿美
 - 2) 哲学分科会 遠藤 健一郎
 - 3) 臨床分科会 原口 正
 7. 書籍紹介
 - (1) 千石真理編著『仏教心理学入門』 岡田 成能
 - (2) 『瞑想箱庭療法の理論と実践』 大住 誠
 - (3) 『心理臨床における「あの世」のゆくえ』 岩瀬 真寿美
- 編集後記 岩瀬 真寿美・田邊 英一

巻頭語

第16回日本仏教心理学会学術大会で実感した絆

千 石 真 理

(日本仏教心理学会会長 心身めざめ内観センター/公立鳥取環境大学)

第16回日本仏教心理学会学術大会が2024年11月16日、無事終了致しました。新型コロナウイルス対応のため、ここ数年学術大会はオンラインリモート会議システムによる開催が続き、前回対面によって行われた2019年第11回学術大会より、実に5年ぶりに京都の佛教大学で参加者が一堂に会することができました。

基調講演者として、スタンフォード大学ハートフルネスラボ創始者であり、同大学、東京大学で教育学、精神医学等の研究、教鞭を取られているステイヴン・マーフィー重松先生をお迎えし、大会テーマ「仏教心理学に期待することー東洋と西洋の融合を目指してー」に沿ってご講義いただきました。先生は長年スタンフォード大学の学生たちが、充実した人生を送ることができるようにとマインドフルネスの指導、科学的探究を行ってきましたが、マインドフルネスは個人のストレス解消や抱えている問題を解決するためのヒントを得るために実践される傾向にあります。そこで、マインドフルネスに創造的な表現、変容をもたらすハートフルネス（開かれた心、思いやり、慈悲、責任）を導入し、実践することこそが伝統的な智慧と最先端科学を統合させ、AI時代に生きる力、人間関係を築く共感力、レジリエンス、リーダーシップ等を育むことができると提唱されています。東洋と西洋の宗教と心理の融合であるハートフルネスの実践法を誰もが行える簡単なワークショップを導入しつつ、体験できる先生のプログラムは、日米の大学のみならず、高校生サマープログラム、親子向け、医療従事者、企業等、多くの分野で関心を持たれ、開催されています。世界が戦争や自国優先主義で分断されつつある今、ハートフルネスに学ぶことは自分自身の人生の道標にもなり、世界を共存共栄に導く上で、とても重要なことだと実感しています。

日本仏教心理学会会長としては、例年の学術大会の講師を選考、招請することは大任です。本年度は、過日、東京大学本郷キャンパスで開催された日本内観学会学術大会・国際内観療法学会で登壇された重松先生の講座に参加し感銘を受け、是非、我が日本仏教心理学会でも会員の皆様に「ハートフルネス」を体感して頂きたい、と思った次第です。

ご快諾下さった先生は、「東京大学では主に心理学科の学生や、精神・心理療法家に向けたお話をした。日本仏教心理学会では会員の皆様に寄せた宗教、文化、生と死の話をしましょう。」と言って下さり、アイルランド系アメリカ人の父、日本人の母、深い絆で結ばれた四国の祖母の話、「一期一会」「初心」など日本の格言を交えつつ、日本の精神文化と最先端の科学を通して生き方、死に方を学ぶ奥深さを説いて下さいました。ワークショップでは、参加者の皆様とも交流し、その後のディスカッション、総会、一般演題の全プログラムを通して、遠隔では決して味わえない、対面でこそ実現する、コミュニティの温かさ、連帯感を味わうことができました。

その後の4年ぶりとなる懇親会は、大会長、鈴木先生のセンスが光る、素敵な中華レストランで、重松ご夫妻と共にゆったりとした時間を過ごすことができました。

全般に、仏教心理学を社会貢献に生かしたいと願う会員の皆様との絆を改めて認識し、共に前進したいという思いを共有できた、本当に良い会になったと思います。

最後になりましたが、ご多忙の中、大会長を努めて頂き、万全の準備を整えて下さった鈴木康広先生に心より御礼申し上げます。また、詳細に渡り大会を企画、支えて下さった松永博子先生、会計でご尽力いただきました鮫島有理先生他、ご助力頂いている運営委員の先生方、参加して下さいました皆様、学会をいつもご支援下さっている会員の皆様に、改めて御礼申し上げます。

本当に有難うございました。今後とも、日本仏教心理学会を、どうか宜しくお願い致します。

1. 日本仏教心理学会第 16 回学術大会を終えて

鈴木 康広

(第 16 回学術大会大会長/佛教大学教育学部臨床心理学科教授・プラクシス鈴木)

2024 年 11 月 16 日、日本仏教心理学会第 16 回学術大会大会長を務めさせていただきました。2020 年以来 4 回のオンラインでの学術大会開催を経て、コロナ禍が明けて久しぶりの対面大会を、京都にある私の勤務校/佛教大学で開催いたしました。例年なら真っ盛りである紅葉も色づき始めたばかりでしたが、天候にも恵まれ、遠方からの会員の先生方のご参集もいただき、盛会にて大会を無事終えることが出来ました。参加して下さった皆様には、心より御礼申し上げます。

今回は、「仏教心理学に期待することー東洋と西洋の融合を目指してー」を大会テーマにいたしました。コロナ禍は終息しましたが、ロシアによるウクライナ侵攻と核の脅し、イスラエルによるガザ紛争など、先行き不透明な（先行きが見通せない）不穏な日々の渦中に、未だ私たちは巻き込まれています。自我と自我、自己主張と自己主張、力と力が激しくぶつかり合う西洋的な価値観の闘ぎ合いのなかに私たちは置かれているかもしれません。一方、東洋の仏教には「中道」という教えがあります。それは、どっちつかずの日和見主義ではなく、両極端にぶれずに「どっしりと構える強さ」に基づいています。どちらかの極論に流されない「強さ」です。どんどん過激化して極論にいたって相手を責める、他者の責任とする「犯人/悪者さがし」の方が簡単です。自分が「犯人/悪者」ではないと自己弁護できるからです。「中道」では、自らの影 shadow を他者に投影しないで、常に自らを内省/内観する、真の「強さ」が求められます。

「西洋文明」とは異なった「仏教という智慧」（中道など）をもって心理学的に取り組める、日本仏教心理学会ならではの貢献の余地がここにあると思われます。本学術大会に期待する所以です。

その意味で、本学術大会の基調講演にはうってつけのスティーヴン・マーフィー・重松先生（スタンフォード大学）をお迎えしました。日本生まれのアメリカ人で、東洋と西洋を体現される方です。講演「ハートフルネスー東洋と西洋の宗教と心理学の融合ー」では、「念」という漢字を「今、心 heart をむけること」と解き明かし、here & now での呼吸（生きている実感）と慈悲、そして責任をマインドフルネスに加えることがハートフルネスであると説かれました。

「生きること」の意味をトム・ハンクスの出演する映画や「寅さん」の映像（人間は何のために生きているのかな）を用いて visual に呈示され、講演会場の外の広いロビーのスペースを用いて参加者全員が「生きていることが実感できる」ワークが行われました。講義による頭だけでの理解ではなく、ワークで身体を使つての体験に、参加者は感銘を受けていました。休憩をはさんで、ディスカッションが行われ、質疑応答も活発でした。東洋と西洋の統合・融合というより、東洋と西洋の「対話」は、参加者各自のなかで確実に経験/体験されたと思われます。

昼食休憩（評議委員会開催）の後に、総会が開かれ、2023 年度の会計報告・2024 年度の収支予算書が審議され承認されました。

午後からは一般演題があり、遠藤健一郎先生（仏教心理哲学の始まりと今後の展望について）、矢野恭治先生（空海の十住心思想）、仁田公子先生（内観の方法と効果～仏教心理学的視点から～）の三つの発表がありました。昨年の学術大会では一般演題はなかったので、二年ぶりですが（それぞれの分科会からの推挙もあり）、活発な質疑応答がなされ、参加者・演者共々の熱意が伝わってきました。

終了後は懇親会として、会場の佛教大学の近くの、しょうざん（中国料理レストラン 楼蘭）に場所を移し、スティーヴン・マーフィー・重松先生夫妻もお迎えして、ケネス田中先生の乾杯の挨拶のもと、親交を深めることができました。学生食堂での立食ではなく、個室での椅子席だったので、ゆったりと料理と会話を楽しむことができ好評でした。

大会長としては一日（と準備）の苦労が報われたという感慨がありました。

ご登壇いただいた重松先生、大会実行委員の千石先生、松永先生、運営委員の先生方、いつも学会の維持、運営にご助力いただいております会員の皆様、本年度も学術大会をご支援いただき、本当にありがとうございました。

2. 基調講演とディスカッションを聴いて

阿部 洋子

（跡見学園女子大学名誉教授、放送大学非常勤講師）

講演者のマーフィー重松先生は、スタンフォード大学ハートフルネス・ラボ創設者であり、同大学ライフワークス統合学習プログラムの共同創設者である。お名前で分かる通り、御尊父様がアメリカ人で、御母堂様が日本人である。日本生まれ、アメリカ育ちということで、講演会のタイトルの副題にあるように、東洋と西洋の宗教や心理学の架け橋の役割を果たしている方である。ハーバード大学大学院で臨床心理学博士号を取得した後、東京大学留学生センター（現国際センター）および同大学大学院教育学研究科の助教授を経た後、アメリカに帰国し、スタンフォード大学教育学部客員教授、医学部特任教授を務め、現在は、医学部に新設された“Health and Human Performance”（健康と能力開発プログラム）にて、教育のためのプログラムとして「ハートフルネス（heartfulness）」を開発した方である。

ハートフルネスに先立ち、うつ状態、不安、絶望、自殺念慮など様々なメンタルヘルスの危機への支援の方法として、既にマインドフルネス（mindfulness）やコンパッション（compassion）が有効であることが、科学的なデータから証明されている。マインドフルネスもコンパッションも仏教伝来の概念をベースにしており、「あるがまま」の自他を受け入れることで、ストレス低減、心身の安定を図ることができることが認められている。しかし、スタンフォード大学の心理学の授業では、スピリチュアルの問題として教えることはできるが、宗教として話をすることはできないということであった。それはキリスト教ではなく仏教をベースにしているという理由だけではないだろう。現時点では、仏教系の大学以外では、マインドフルネスなどの有効性は、科学的に証明されている側面を教授することに留まるのだろう。

マーフィー重松先生が、マインドフルネスから、ハートフルネスへと発展させていったのは、アメリカのマインドフルネスは、「私」の心身を安定させるためにあるとか、「私」

のストレスを低減させるためにあるなど狭量なものになってしまっている。そこには「心（ハート）」が無いという指摘であった。マーフィー重松先生はマインドフルネスとは、本来、自分だけのためにだけやるのではなく、他人のためにやることが重要だ。更に人生が過酷なものだったとしても、感謝の心を持つことで幸せになれる、健康になれるということであった。マインドは認知能力であるが、ハートは感情、感性、日本語の「こころ」に近いということであった。別の言い方をするならば、知識の教育より、心の教育を大切にするプログラムを開発する必要があるということである。それ故、ハートフルネスのプログラムは、「こころ」のあるマインドフルネス、コンパッション（慈悲、思いやり）、責任（responsibility）を基本要素としていると述べている。

講演会では、複数のエクササイズを体験させて頂いた。例えば、目と目を合わせて、1対1で、次から次へと相手を変えながら、“I like you as you are.”（ありのままのあなたが好きです）と挨拶するなどであった。これはポジティブな部分、ネガティブな部分、両側面を含めたあなたが好きです。それと同時に、私自身の全部が好きだと言って貰えたと感じることができたかどうかであろう。しかし「あるがままの自分」を体験することはできても、それが具体的に何だと言葉にすることは難しい。だからこそ、エクササイズを通じた体験が重要だということである。対人関係の中で、たとえ短い挨拶であっても、敬意をもって傾聴することが癒しに繋がることの指摘もなされた。

ハートフルネスが誕生した背景には、愛媛県在住であった母方の御祖母様の影響がある。御講演の中でも再三、御祖母様のお話に取り上げられた。御祖母様が常に「ありがとう」と口に出していたと感謝の心の重要性が語られた。また御祖母様の「仕方がない」と語ったことは、変えられないものを諦めることではなく、勇気ある生き方であり、「受容」の中心を成す態度であるとしたなどであった。

3. 一般演題の発表を終えて：

1) 「補遺としての『十界一如の義』考」

遠藤 健一郎

（仏教心理哲学分科会 2024 年度代表／水島協同病院精神科医長）

第 16 回日本仏教心理学会学術大会にて「仏教心理学の始まりと今後の展望に

について」を発表した際に、役行者講式にある「色心不二の談」と「十界一如の義」について述べました。このうちの「十界一如の義」を通して、十界の基底には「善なる本質」といえる自性清浄心があることに触れたのですが、時間が限られており、それ以上のことについてお話しすることができませんでした。今回、このニュースレターの場を借りて、発表の補遺として、もう少し細かく述べてみたいと思います。

発表では須川雅之氏の「超越的次元に対応させた『一人の人間が様々な役割を果たすための生き方』の図」から着想した「自性清浄心を基底とする『十界一如の義』」（下図参照）について述べました。この図では縦軸が「利他的⇔利己的」となっていますが、これは下に行くほど主体性が強まることを表しています。また、横軸は「世俗的⇔離俗的」となっており、こちらのほうは左に行くほど客体性が強まります。

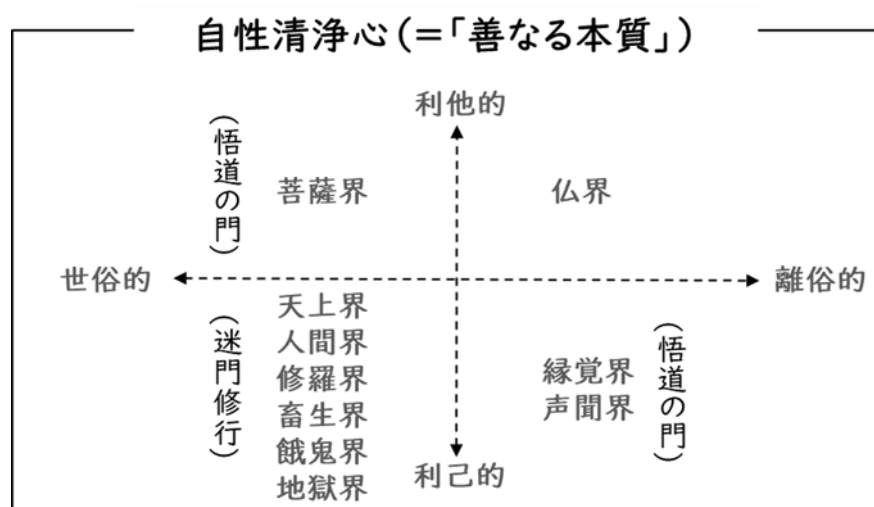
したがって、左下の「迷門修行」の象限は主体性も客体性も強いいため、主体と客体は分離しており、客体から主体に向かう動向である認識は実体的となり、また、主体から客体に向かう意志は煩悩を伴うものとなります。右下の縁覚界・声聞界の象限では、主体性は強いですが、客体性は弱く、客体は主体に取り込まれるようになって、認識は現象的なものとなり、実体性は弱まります。

このため、意志に伴う煩悩も弱まります。それに対して、左上の菩薩界の象限では、客体性は強いのですが、主体性は弱まっており、主体は客体の背景に退いてしまうようになります。このときに認識は実体的なままですが、主体から客体に向かう動向である意志は弱まり、煩悩も生じにくくなります。右上の仏界の象限は主体性も客体性も弱まっており、主観と客観が一体化して、実体性はなくなり、意志や認識もない無分別な状態となるので、通常の言語を持つては表すことは不可能となります。通常の言語と異なる真言であれば表現可能かもしれませんが、この領域は理念型であり、理想型に過ぎず、現実世界とすることはできません。ただし、この仏界を想定することにより、右下象限や左上象限といった「悟道の門」の位置づけが可能となります。

なお、右下の縁覚界・声聞界の象限では、瞑想により、対象を現象的認識により主体のうちに捉え込める反面、対象を実体として捉えられなくなるために、spiritual bypassing を生じるようにもなります。それに対して、左上の菩薩界の象限では、実体性を有する現実世界にとどまるといった engaging が可能なのですが、現象的認識を得にくく、分別にとらわれやすくなります。やはり、「悟道の門」とするには、これら縁覚界・声聞界と菩薩界の両方の往来が必要であると思われます。

最後に、実体性を持った現実世界そのものである「迷門修行」について述べておきます。ここには、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界といった六道輪廻があるのですが、これらはそれぞれの欲望（煩悩）による苦しみに対応しているように思えます。

つまり、享楽を求めることによる苦しみが地獄界、食欲などの自己保存欲による苦しみが餓鬼界、性欲などの種族保存欲による苦しみが畜生界、闘争を求めることによる苦しみが修羅界、知識を求めることによる苦しみが人間界、安楽を求めることによる苦しみが天上界となっているのでしょう。「悟道の門」によってこの六道輪廻からの解脱を目指すのですが、実際に解脱するのはかなりの難行であるものと思われます。



図．自性清浄心を基底とする「十界一如の義」

2) 「研究発表で見たトランスパーソナルの世界」

矢野 恭治

(日本仏教心理学会会員/哲学分科会所属)

学術大会デビューの矢野です。鮫島有理先生の「研究発表者は自身の専門分野を明示すべき」というご意見（『本学会誌』第14号、72頁）にしたがって、私のバックグラウンドを記します。私は「人間の心とは何だろう」という関心を持っていて、大学は心理学コースに入りました。入学の半年後、医学部に入学した友人が、「臨床心理学をやりたいなら、患者さんに会わせてやろう」と大学附属病院の敷地に連れていかれました。その大学は医学部紛争のさなかで、精神科病棟の患者を外に開放していたのです。患者さんたちの表情を見て、「私の力でこの人たちと向き合うのは無理だ」と直感し、試験管でも振って気楽に生きようと有機合成化学に専攻を変えました。転学後も心理学の勉強を続けましたが、そのうちに仏教の方が面白くなり、読書の重点を仏教に移しました。現在の私の専門分野は真言密教、その中でも主に弘法大師空海の思想を研究しています。

リタイアの2年前に本学会に入りました。会則で定める正会員資格要件の「仏教または心理学の研究・臨床の職にあるもの」を満足しないため、一般会員での入会でした。

昨年、高野山大学から修士号（密教学）を授与されたとき、指導教授から「これであなたも研究者としてスタート台に立ちました」と言われ、その言葉をよすがとして、正会員への種別変更を申請しました。ケネス田中先生に推薦者になっていただき、松永博子先生のご尽力によって運営委員会で正会員への変更が認められました。

ご支援いただいた先生方に厚く感謝申し上げます。しかも、これほど早く学術大会での発表機会が与えられたことは幸運でした。山田博夫先生に「空海の十住心論」について

発表することを報告すると、「空海の話だけでは、『ああそうか』で終わってしまう。心理学の先生が多いから、現代心理学の成果と比較しなさい」とアドバイスを頂きました。私の心理学の知識は、ユング、アドラー、マズローあたりまでで、西洋心理学（世間）と仏教（出世間）の概念を比較することは容易ではありませんでした。

しかし、必要に迫られて、ウイルバー、グロフ、などトランスパーソナル心理学の世界に入ると事情が一変しました。今回の発表の眼目は、「空海の秘密莊嚴住心では、我々の心の奥底に大日如来を始めとする諸仏、諸尊、諸衆生他からなる曼荼羅世界が広がっている。また、我即大日と感得することが密教の覚りである」ということでした。

ケン・ウイルバーは次のように言います。「上位微細では、神々、諸仏、天使たち、諸霊・・・というかたちで複数だった元型的な存在が、下位元因領域ではその根源であるただ一つの究極の神へ還元され、さらに自己がもともと神であることが開示される」と。大日如来を神と置き換えれば、空海の秘密莊嚴住心とケン・ウイルバーの意識構造の究極は同じではないか。この事実は私にとって驚きでありました。真言密教とトランスパーソナル心理学は相性が良いようです。空海とトランスパーソナルの思想の比較研究を続け、両面から人間の心の真相を追究したいと思います。

最後に、今回の会場である佛教大学には貴重な思い出があります。40数年前、当時の坪井俊英文学部長（後に知恩院門跡、浄土門主）から、「空海の真言密教は最高の仏教である。空海を理解するためには唯識や華嚴を学ぶ必要がある」と諭され、佛教大学の通信教育課程（仏教学専攻科）でアビダルマから中観、唯識、天台、そして華嚴と学びました。各々が壮大な哲学の体系であり、日本仏教とは異質の構築物がそこにありました。しかし、当時石油コンビナートで巨大なプラントを相手に仕事をしていた私は一日も休暇を取ることができず、スクーリングに参加できませんでした。

そのため、課程を修了することができませんでしたが、佛教大学での学びは若き日の

良き思い出となっています。素晴らしい会場を提供して下さった鈴木康広先生、ありがとうございました。

3) 「内観の方法と効果～仏教心理学的視点から～」

仁田 公子

(青山心理臨床教育センターカウンセラー/東京都公立学校スクールカウンセラー)

まず初めに、佛教大学での学会発表の機会を与えていただいたことに感謝の意を表したいと思います。7月の分科会で、「内観」についてお話させていただいたところ、ケネス田中先生から、11月に学会でも発表を、とのご提案がありました。学術的な内容に乏しく、自身の内観体験と臨床経験に基づいて語る内容は、学会での発表として適切かどうか迷いましたが、このことを日頃からの思索を深めるきっかけにさせていただきたいと思いお引き受けしました。

筆者は、心理療法を実践していますが、今回は治療者として内観を治療に用いる立場ではなく、ひとりの内観者として「内観」についてお話したいと思っていました。体験を通じたお話で、少しでも多くの方に「内観」を正しく理解していただきたいとの思いがありました。

学会では午前中に、スティーヴン・マーフィー・重松先生のご講演がありました。先生は、ご自身の体験に関連づけて、“Memento Mori”(=“remember you die”)という格言についてお話されました。このことばを内観との関連で考えると、人は内観をすると、自らの「死」を常に身近に感じ、「今ここ」ですべきことが自然にわかるものです。先生のお話を伺いながら、自分が縁に従って今生かされていることに感謝し、素直な気持ちで発表を引き受けようと思ったのだと再確認いたしました。

私は心理臨床の仕事に従事して間もなく集中内観を体験しました。しかし、実際の臨床現場では西洋的な心理療法のアプローチを中心に臨床活動をしていました。その後、内観とフォーカシングに出会い、それらを学び続ける中で仏教に強い関心を持つようになり、ケネス田中先生のサンガで学び始めたのでした。そして、コロナ・パンデミックをきっかけに、オンラインで仏教心理学者のデービッド・ブレイジャー氏の主宰する“Global Sangha”に参加し活動する中で、ブレイジャー氏の仏教心理学の講座で“tutor”を担当することとなり、世界各国の人々と仏教心理学を学んできました。その中で、二つの異なるパラダイムが背景にある、西洋と東洋の心理療法に通底する理論をどうすれば了解可能な形で構築できるのか、ということ进行思案し続けてきました。

しかし、健全な「自我」の成長を大切にする西洋心理学と、苦しみからの救いとは我執を手放して「無我」になることとする仏教心理学の間には、超えることが難しい溝があると感じ悩んでおりました。

今回の発表では、仏教心理学的視点から内観について語るつもりでしたが、西洋的なパラダイムとの対比で十分な説明ができませんでした。ただ、発表したことにより更に思考が深まり、以下のようなことばが出てきました。

「内観」では、病気の治癒は結果の一部にすぎません。「症状」という苦しみへの固着から解放されて、あるがままの自分を受容できるようにするのが内観です。仏教的には、人類に普遍的な苦しみは、病気のあるなしにかかわらず、質的に異なることはありません。絶対界からみれば人間のいのちは限定的で無常だからです。また、「懺悔心なくして、真に自分あるいは他者に慈悲を向けることはできない」という気づきが内観によって生じます。

これは西洋の心理療法では否定的に捉えられる傾向があると感じています。「内観」を続けた人には、罪悪感を安心して表明できるところが育ちます。その意味で、内観に

よりこころが健康になるということは、善悪の彼岸で自分を受け入れながら、自利利他の実践により幸福になるということなのではないかと思っています。今後も、引き続き仏教心理学的視点から内観を探究し続けたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

4. 第16回学術大会の報告

松永 博子

(日本仏教心理学会 運営委員/学術大会担当)

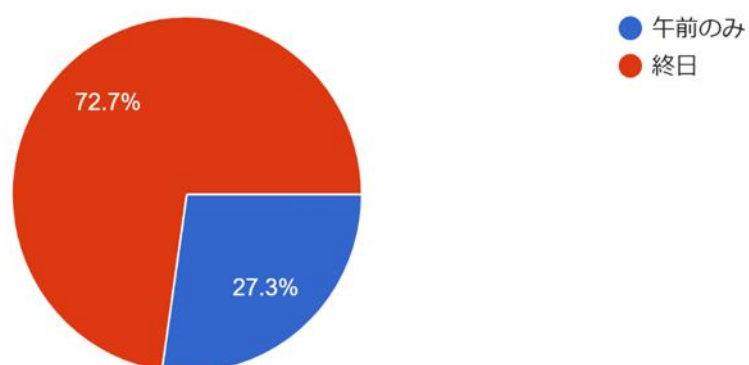
第16回日本仏教心理学会学術大会は、新型コロナウイルス感染症が落ち着いたということもあり、久しぶりの対面開催となりました。私からは、学術大会の報告をさせていただくこととします。

学術大会への申し込みは28名（ゲスト：1名、正会員：13名、一般会員：4名、非会員：10名）であり、学術大会への参加者は24名（ゲスト：1名、正会員：13名、一般会員：2名、非会員：8名）でした。

学術大会後のアンケートには11名の方からの回答が得られました。

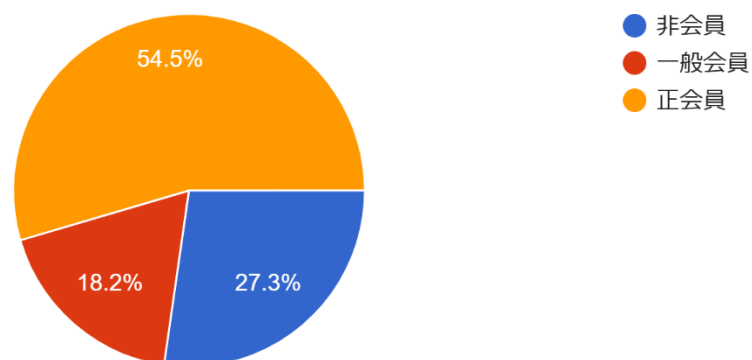
1. 参加の形態

午前中のみが27.3%、終日が72.7%でした。



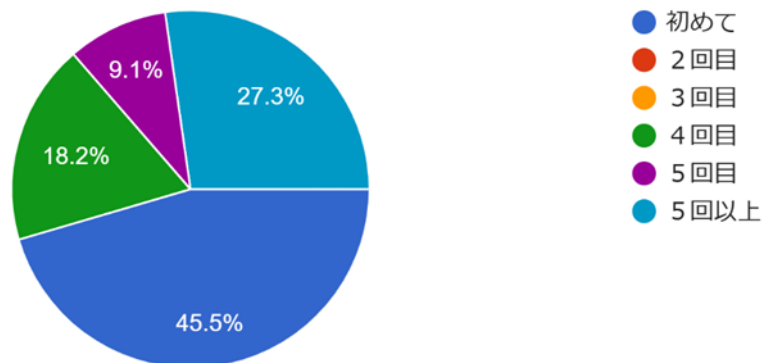
2. 会員種別について

非会員が 27.3%、一般会員が 18.2%、正会員が 54.5%となっていました。



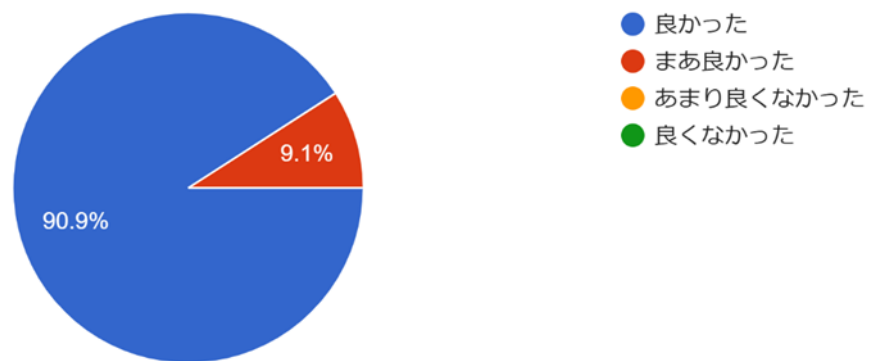
3. 日本仏教心理学会学術大会への参加回数

初めての参加者が 45.5%、4 回目が 18.2%、5 回目が 9.1%、5 回以上が 27.3%であり、回答数は少ないもののリピーターが多いことがわかります。

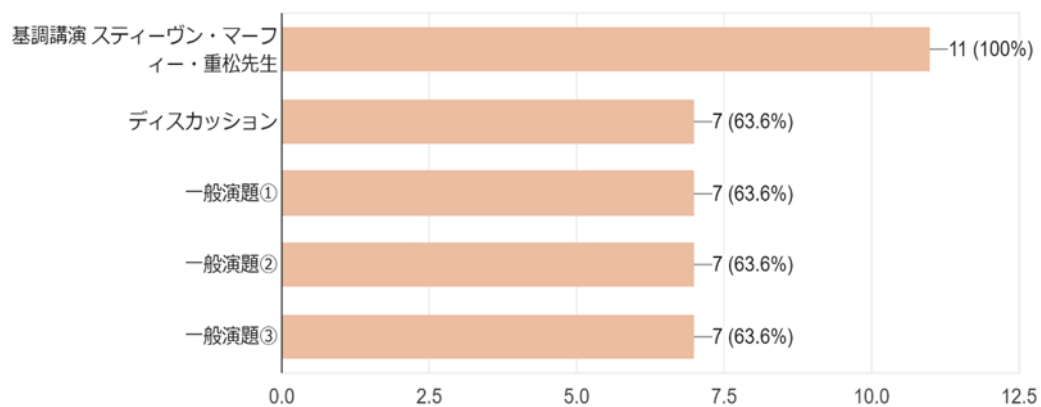


4. 学術大会の印象

学術大会の印象は良かったが 90.9%、まあ良かったが 9.1%でした。



5. 特に印象に残るプログラム（複数回答可）



特に良かったセッションとして、スティーヴン・マーフィー・重松先生の基調講演が100%、ディスカッション、一般演題の①から③はいずれも 63.6%でした。

6. 5のように回答した理由

回答の理由には、以下の8件の記載がありました。

- ・ 全てのお話の中に、ますます不安や苦しみが深まる今の世界のなかで、人々が安寧に希望を持って生きていくためにはどうしたらよいか、ということについて、共通の方向が感じられました。
- ・ 基調講演、ディスカッション、一般演題すべてに渡って勉強になりました。
- ・ 初めての参加でしたが、仏教心理学について知りたくて参加しました。内容は、難しくはありましたが、どなたのお話も、ある程度は分かる内容でした。ただ、「空海の十住心思想」については知識がないので難しく感じました。でも、空海という人がどのような人であったのか、少しわかりました。私は四国の愛媛、松山の出身なので、お遍路さん、弘法大師になじみがあり、実家は真言宗でしたので、空海に親しみを持っていましたが、仏教の教えについては、深く考えたことはありませんでしたので、大変勉強になりました。
- ・ 特に重松先生の講演に心が動かされた。学問的な内容と予想していたが、先生の経験を中心に話をされて説得力があった。久万町における祖母との1年間の生活が先生の心を癒して生きる力を与えたという話が殊に印象的だった。
- ・ 基調講演はワークもして頂き、興味深かったです。一般演題の先生方の御発表は難しい領域であるにも関わらず、真摯な御研究態度に心動かされました。有り難うございました。
- ・ 初参加でも分かりやすかったプログラムにチェックを入れました。
- ・ 健全な死生観が生きるための力をくれると考えているため、その考えを勇気づけてくれるには十分過ぎるほどの内容でした。ありがとうございました。教室内外でのワークは、お互いが率直に「愛」の存在であると実感できるものであり、気恥ずかしさや言語のギャップなど様々な心の声とも対峙でき、内観のきっかけが生まれる素晴らしいものだったと思います。

- ・それぞれ心理学と仏教の接点が分かりやすかった。

7. スティーヴン・マーフィー・重松先生へのメッセージ

メッセージは、以下の 11 件でした。

- ・ご講演ありがとうございました。若者のライフをサポートしたい気持ちは私も同じです。
- ・マーフィー先生、心温まる音とワークをありがとうございました。孤独に生きる人々が、ふたたび他者と、そして世界とつながるための具体的な「ハートフルネス」のワークも楽しく体験させていただきました。

先生の温かいハートが場全体に広がったように感じました。孤独と貧困と争いの世界を、人々が生き抜くために大切なのは、ふれあいの喜びを感じられる場だと思います。これから時代を担う人々が VR の世界に埋没しすぎることなく、リアルに触れ合うことができる、優しくて安全な場、そこで「ハートフルネス」の体験学習を施すことができたなら、子どもたちが今以上に人と共に生きることの喜びを実感できるようになるかもしれないと思います。実践の場で活用できるよう、学びを深めていきたいと思っております。ありがとうございました。

- ・一般的な講演とは異なり、“I see you” などのエクササイズがあり、楽しんで参加することができました。ありがとうございました。
- ・マインドフルネスではなくてハートフルネス、という言葉に教えられました。底流に仏教の基本思想があり、その実践の方法として、大学での講義内容と、そのように考えると、大変よくわかりました。

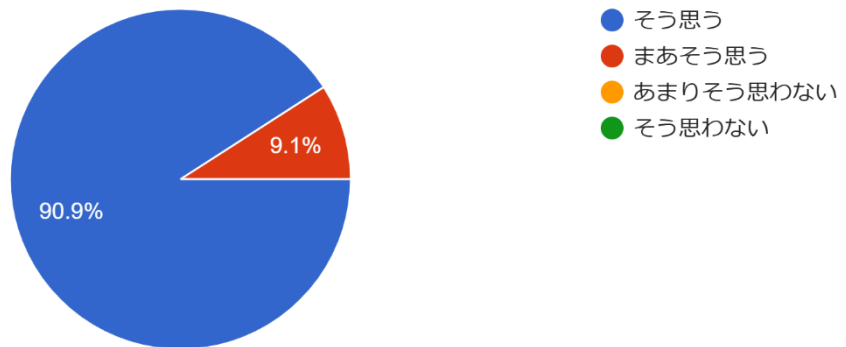
先生のお母様が愛媛の久万出身という事で、偶然にも私の実家は愛媛の松山の近くで、夏休みに父に連れられて久万の山小屋に泊まりに行ったことを思い出しました。

愛媛のおばあ様との生活が、先生の心にあたたく残り、先生の生き方に大きな影響を与えられていることを感じました。先生のお話はとても心にのこりました。ありがとうございました。

- ・111 歳まで生きられた先生のお祖母さんの話が印象に残っています。人を癒すのは人であり自然であると思います。少年時代まで愛媛で過ごした小生にとって久万町の話は心に染み入りました。ありがとうございました。

- Thanks for your presentation. I had a great time with Murphy Sensei. Through discussion, I'm interested in FROM MINDFULNESS TO HEARTFULNESS. This point of view suggests the importance of human relationship. I think success involves not only individualism but also building heart-warming relationship with others because success without loved from anyone is not success. As Sensei, I want to think what meaningful life is. Thank you.
- ハートフルネスを初めて知りました。これから勉強をさせていただきます。有り難うございました。
- 生きる力と智慧を提示して頂けました。
- 素晴らしいご講演をありがとうございました。Heartfulnessについて学んでみたい気持ちが強くなりました。
- Thank you very much for your lecture today. I am who remarked "everyone is cute" in today's PRACTICE. I usually work as a speaker for self-development. I have been studying Buddhism at Koyasan University since last year because I have come to believe that the essence of Buddhism and the beliefs that are traditionally rooted in Japan are exactly what we need today. There were many impressive parts of today's lecture, especially when you said, "I have decided my destiny. I made my destiny." I was especially moved by your choice of the words "decided" and "made". I think it is very important to remind ourselves that we have the power to decide and to create. I look forward to reading the book you autographed for me today. Thank you very much.
- ワークショップ形式で、体験的に学ばせていただきました。

8. 次回以降の参加希望



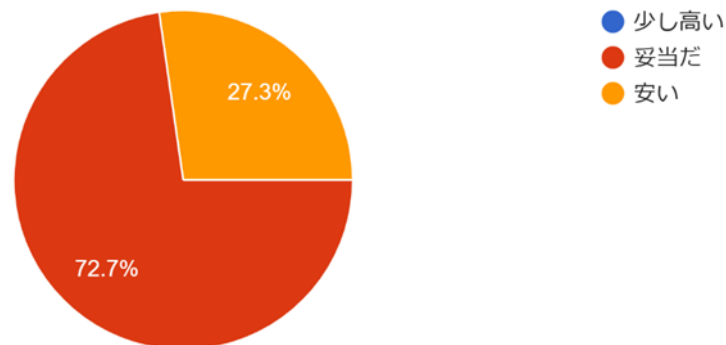
次回以降の参加意向について回答を求めたところ、
そう思うが 90.9%、まあそう思うが 9.1%でした。

9. 次回以降の学術大会で取り上げて欲しいテーマ：以下の 6 件の提案をいただきました。

- ・ こどもの心の育ちについて：仏教心理学的情緒発達論
- ・ マインドフルネス瞑想やそれ以外の仏教瞑想について、禪的森田療法（宇佐療法）について、真宗カウンセリングについてなど。
- ・ 仏教と心理学がどう協力できるか？
- ・ 初期仏典と臨床心理学
- ・ 仏教思想と自己肯定感について
- ・ 脳科学と仏教

10. 学術大会参加費について

妥当だと考える参加者が 72.7%、安いと考える参加者が 27.3%でした。



11. 学術大会への要望：

- ・大学内の会場案内をお願いしたかったです。
- ・体験型のワークショップ（坐禅、ハートフルネス、マインドフルネス瞑想、内観など）を学会として開催できたら、会員増加にもつながるのではないかと思います。
- ・学会としては、一般演題が少ないように感じました。時間が限られているのであれば、ポスター発表形式として、多くの発表者に参加してもらうようにするのもよいと思います。
- ・発表時間ですが、15分は短いと思います。話したいことをかなり削る必要がありました。できれば30分欲しいですが、無理ならばせめて20分は欲しいところです。
- ・ぜひ今後も継続していただけるとありがたいです。

アンケート結果を上記のように取りまとめましたので、ご報告させていただきました。ご参加くださった皆様、回答くださった皆様に学術大会実行委員を代表して心より御礼を申し上げます。また、久しぶりの対面式の学術大会のため、至らぬ点多々あったかと思いますが、反省点は次回の学術大会に活かして参ります。

5. 2024年度の研究会活動報告/講習会と分科会
—2024 年度報告と 2025 年度ご案内—

ケネス 田中（日本仏教心理学会 運営委員/研究会担当）

新体制：講習会と分科会は、2024年度より新体制の下で再開しました。この新体制の特徴は、講習会と分科会が融合された事です。時間的には講習会も分科会も、土曜日14:00～15:30という同じ時間帯に行われ、運営的には一つの運営委員会が、両方を担当することになりました。

2024 年度： 三回の講習会と7回の分科会

4月20日 講習会 講師： 井上ウィマラ（前日本仏教心理学会会長）
「仏教とスピリチュアルケア」

5月18日 分科会 発表者：須川雅之（哲学分科会）

「心と脳の関係について」

6月15日 分科会 発表者：長島登、田邊英一、他、（歴史分科会）

「『科学化 する仏教』第2章「催眠術と仏教」」

7月20日 分科会 発表者：仁田公子（臨床分科会）

「内観の方法と効果～仏教心理学の視点から～」

8月 休み

9月21日 分科会 発表者：矢野恭治（哲学分科会）

「空海の十住心思想」

10月12日 講習会 講師：蓑輪顕量（東京大学教授）

「仏教瞑想の目指したものは何か」

11 月 16 日 日本仏教心理学会大会のため休み

12 月 21 日 分科会 発表者：田邊英一（歴史分科会）

「湯浅泰雄の「身体論」と「技術知」について
—「科学化する仏教」第 5 章第 2 節を読んで」

1 月 25 日 講習会 講師：河村諒（愛知県立大学准教授）

「宗教の臨床的な関わりの意義と実践性」

2 月 15 日 分科会 発表者：笠原泰淳（臨床分科会）

「おつとめと癒し」

3 月 休み

2025 年度の日程： 新規の参加をお待ちしています。

4 月 19 日	分科会	全体発表	—	哲学分科会担当
5 月 17 日	分科会	全体発表	—	歴史分科会担当
6 月 14 日	講習会			歴史分科会担当
7 月 19 日	分科会	全体発表	—	臨床分科会担当
8 月		休み		
9 月 20 日	講習会			哲学分科会担当
10 月 18 日	分科会	全体発表	—	哲学分科会担当
11 月 1 日	分科会	全体発表	—	歴史分科会担当
12 月 20 日	分科会	全体発表	—	臨床分科会担当
1 月 17 日	講習会	臨床分科会担当		
2 月 21 日	分科会	全体発表	—	哲学分科会担当
3 月		休み		

講習会：新体制以前は、「仏教と心理学の接点を追求する勉強会」と題して、2000 年から 151 回も行われて来たという歴史があります。今年度から、内外部から講師を招き、年 3 回開催することになりました。講習会には、日本仏教心理学会の会員でなくても参加することができますが、今年より、参加者には登録して頂くことになりました。（登録申し込みサイト、下記参照）

分科会：年 7 回の分科会は、歴史分科会、哲学分科会、臨床分科会に分かれて、各人の興味の領域を掘り下げて学ぶ機会を提供しています。

分科会の前半（45 分）には、担当の分科会による発表が全員を対象として行われます。後半（45 分）には、各分科会に分かれて発表やディスカッションが行われます。

分科会に関心ある方はどなたでも、日本仏教心理学会の会員でなくても、参加できるようになっています。しかし、講習会と同じく登録して頂くこととなります。（登録申し込みサイト、下記参照）

分科会は、次の三つの分科会のいずれかに所属して頂くこととなります。

- 1) 仏教心理学歴史分科会
- 2) 仏教心理哲学分科会
- 3) 仏教心理臨床分科会

各分科会の趣旨は下記の通りとなっています。

分科会への参加は、日本仏教心理学会の会員が中心となりますが、会員でない方も 5 回まではオブザーバーとして参加することができます。この期間を通して、学会会員なることが期待されます。また、分科会では、正会員に限らず、一般会員の方でも、制限なしで参加できるようになっています。

申込サイト：<https://form.os7.biz/f/a2c21e9a/>



登録者：今年度中、登録者の数が段々と増え、現時点では、90名となりました。

下記がその詳細となります。特に学会員には、積極的な参加が期待されます。

学会員	—	50名	(学会員の約3分の1)
非会員	—	40名	
講習会のみ	—	24名	
分科会	—	65名	
仏教心理学歴史分科会	—	9名	
仏教心理哲学分科会	—	22名	
仏教心理臨床分科会	—	34名	

学会の心臓役：このように分科会と講習会が活発に行われることが、本学会に元気をもたらしめます。これこそが、学会員の研究や実践の内容の向上にも繋がるのです。そして、より多くの論文が本学会誌に投稿されることが期待できるようにもなります。分科会と講習会は、日本仏教心理学会の「心臓役」を担って、学会の使命と目的を果たすことが期待されていると言えます。

録画：毎回の講習会とほとんどの分科会の発表は、録画され、YouTubeにおいて公開されています。復習を希望する方や欠席した方のために大いに役立っています。同時に、本学会の活動の宣伝にもなっていることは確かです。それは、最近の本学会に興味を示す人々の増加からも窺えます。

懇親会：毎回の分科会と講習会の後には、「涅槃寂静会」と呼ばれる有志による懇親会も行われています。より気楽な場で、好きな飲みものを手にし、その日の発表者に質問をし、参加者同士が語り合える楽しい時間となっています。是非、ご参加ください。

分科会・講習会実行委員会：

ケネス田中	—	学会運営委員の講習会と分科会担当	(2024～2025 年度)
渡邊美由紀	—	連絡係担当	(2024～2025 年度)
		仏教心理哲学分科会副代表	(2025 年度)
岩瀬真寿美	—	仏教心理学歴史分科会代表	(2024～2025 年度)
遠藤健一郎	—	仏教心理哲学分科会代表	(2024 年度)
原口正	—	仏教心理臨床分科会代表	(2024 年度)
岡田成能	—	仏教心理学歴史分科会副代表	(2025 年度)
須川雅之	—	仏教心理哲学分科会代表	(2025 年度)
仁田公子	—	仏教心理臨床分科会共同代表	(2025 年度)

武田正文

— 仏教心理臨床分科会共同代表

(2025 年度)

各分科会の趣旨：より多くの方に参加して頂くことを目指して、各分科会の趣旨を再度提示させていただきます。

期待：本学会の研究部門を担い、活発に機能するこの分科会と講習会では、皆様のご参加をお待ちしています！質問は、こちらにお願いいたします。

渡邊美由紀

miyukiwt@yahoo.co.jp

ケネス田中

chacotanaka@gmail.com

6. 2024年度の分科会活動の報告：

1) 歴史分科会に関する報告

岩瀬 真寿美 (仏教心理学歴史分科会 2024-2025 年度代表)

仏教心理学歴史分科会（旧「歴史班」）では、2021 年 8 月より、仏教と心理学の両方にまたがる文献を、特にわが国の研究を中心として歴史的に並べ、仏教宗派、心理療法別に、個々の文献の概要を整理することから始めてきました。2022 年秋からは、仏教心理学の歴史を大きく把握するとともに、過去の研究から学ぶ視点をとりわけ大切にするという本分科会の目的を共有し、2023 年 2 月以降は、仏教と心理学に関わる著作を丁寧に時間をかけて各メンバーから報告しながら、特に碧海寿広著『科学化する仏教』（角川選書、2020）を輪読しました。

以下は、2024 年度の本分科会で実施された発表者とそのタイトルです。

5/18 の分科会 岡田成能「輪読文献『科学化する仏教』第 3 章「密教の科学」を読む」

6/15 の分科会 岩瀬真寿美「『科学化する仏教』第 4 章「禅の科学」を読んで」

7/20 の分科会 田邊英一「『科学化する仏教』第五章

—ニューサイエンスと仏教—を読んで」

9/21 の分科会：田邊英一「『科学化する仏教』第五章（1 節～4 節）

—ニューサイエンスと仏教—を読んで part. 2」

12/21 の分科会：田邊英一「問題提起：安易な「宗教と科学の結託」に見る自我肥大と自灯明—「科学化する仏教」第 5 章第 4 節を読んで—」

これまでの歴史分科会を振り返ると、大きくは次のように見取することができます。

第一期：2021 年 8 月より文献リストの作成

第二期：2023 年 2 月より時間をかけて 1 冊の本を読む形式

今後、2025 年 4 月以降は、第三期として、本分科会メンバーがそれぞれに、さらにこれまでの学びを自身の研究テーマへの収斂していくことが期待されます。たとえば、「密教と心理療法」「禅と心理療法」といった形など、すでに研究報告としてまとめているメンバーもいます。2025 年 2 月の本分科会では、まずは、第二期のまとめから 4 月以降始めていくことをメンバーで確認しました。今後各メンバーの研究テーマを共有し、2025 年夏以降には順番に発表していく形をとる予定です。

2) 哲学分科会に関する報告

遠藤 健一郎 (仏教心理哲学分科会 2024 年度代表)

2023 年度までは教育分科会ゼミ勉強会哲学班として活動をしていましたが、この哲学班を基として、2024 年度からは仏教心理哲学分科会としてスタートしました。分科会内での発表は 2024 年 5 月 18 日から始まっており、下のような発表が行われています。

2024 年 5 月 18 日 矢野恭治「空海の十住心思想」

2024 年 6 月 15 日 於保美紀子「凡夫からみた唯識」

2024 年 7 月 20 日 渡邊美由紀「『善なる本質』と瞑想」

2024 年 9 月 21 日 矢野恭治「空海の心識説」

2024 年 12 月 21 日 須川雅之「Re: 凡夫からみた唯識—2 つの疑問点に関する私見—」

2025 年 2 月 15 日 矢野恭治「真言密教の菩提」

また、このほかにも仏教心理学歴史分科会、仏教心理臨床分科会との全体会では、当分科会からは下のような発表を行っています。

2024 年 5 月 18 日 須川雅之「心と脳の関係について」

2024 年 9 月 21 日 矢野恭治「空海の十住心思想」

2024 年 11 月 16 日に行われた第 16 回日本仏教心理学会学術大会では、一般演題で当分科会から次の 2 つの発表を行っています（発表順に記載）。

遠藤健一郎：「仏教心理哲学の始まりと今後の展望について
— 仏教心理哲学分科会設立前後の歩み—」

矢野恭治：「空海の十住心思想」

2023 年度までのゼミ研究会哲学班において渡邊美由紀さん、須川雅之さん、そして遠藤はすでに発表していたのですが、2024 年度からは新たに矢野恭治さんと於保美紀子さんにもご発表いただきました。矢野恭治さんには空海をシリーズで紹介していただき、たいへん充実した内容となっています。また、於保美紀子さんには唯識を分かりやすく紹介していただき、これに関連した疑問点に答える形で須川雅之さんの発表も行われ、分科会を通してのやり取りに繋がっています。2025 年度から代表が須川雅之さんに交代となりますが、今後のさらなる発展が期待されます。

3) 心理臨床分科会に関する報告

原口 正 (仏教心理臨床分科会 2024 年度代表)

2024 年度の心理臨床分科会の活動についての主な取り組みとして、ご報告いたします。心理臨床分科会代表の原口が、2023 年の日本マインドフルネス学会の会場において、東京大学大学院インド哲学・仏教学の蓑輪顕量教授に日本仏教心理学会の全体会での講演を依頼したところ、快諾していただき、2024 年 10 月に「仏教瞑想の目指したものは何か」というタイトルで講演を行っていただきました。日本を代表する仏教瞑想の研究者である蓑輪先生による講演は、多くの参加者にご参加を得て、仏教瞑想についての有意義な学びの機会となりました。また、心理臨床分科会の参加登録者の人数は昨年度と比較して増加し、分科会の活動が広がりを見せています。全体会では、仁田公子氏による「内観の方法と効果 ～仏教心理学視点から～」というタイトルで内観療法に関する発表が行われ、心理臨床における内観の活用について知見を深める機会を得られました。分科会内では、原口が認知行動療法などの心理療法と仏教についての発表や、現役の僧侶である笠原泰淳氏による発表もあり、仏教的視点からの臨床実践に関する深い洞察が共有されました。

一方で、本年度の課題として、マインドフルネスなどについての書籍を輪読する予定であったものの、実施に至らなかった点が挙げられます。この点については、次年度に向けて、心理臨床分科会の運営について改めて検討していくことになろうかと思います。

また、2024 年度をもって、2 年間にわたり代表を務めてきた原口が任期を終え、次年度より仁田公子氏と武田正文氏が新たに代表を務めることとなりました。

今後も分科会のさらなる発展に向けて、で取り組んでまいります。以上、2024 年度の活動報告といたします。

7. 書籍紹介

(1) 千石真理 編著『仏教心理学入門』晃洋書房 (2024/03 発売)

岡田 成能 (日本仏教心理学会会員)

本書は各領域で最前線に立つ 7 人の専門家の実践と研究により、仏教と心理学の知を結集させ、現代社会の諸問題に解決の道を拓かんとした労作である。

第 1 章：発展するアメリカ仏教—心理学・心理療法を窓口として

第 2 章：仏教と内観—仏教の智慧でいのちの繋がりに目覚め、今を後悔なく
生きるために

第 3 章：森田療法と仏教

第 4 章：心理療法から見た原始仏教

第 5 章：佛教とユング心理学—スピリチュアル・エマージェンシーの観点から

第 6 章：仏教教育と心理学—教育実践に示唆する仏教的人間観とは？

第 7 章：老いを見つめて生きる

第 1 章では著者の米国での仏教研究の成果から、仏教と心理学の相互発展の歴史が紐解かれ、西洋で見出された仏教の意義と現代社会におけるその重要性が提言される。

第 2 章ではハワイでの病院チャプレンの経歴を持つ著者により、浄土真宗に端を発する内観療法に対して親鸞の人生経験を通し改めて仏教的視線が注がれる。

第 3 章では過去に精神的葛藤を抱えた著者が自身を救った森田療法を各宗派の思想を通して分析し、特に密教思想との親和性について論考する。

第4章では心理臨床の現場で活躍する著者から原始仏教の思想を重視する理由が示され、一人一人が持つ本来の力を心から信じることの重要性が説かれる。

第5章では日本仏教の高僧たちが見た啓示的な夢の記述についてユング心理学の理論による分析を試み、スピリチュアル・エマージェンシーの観点から縁起、布置、共時性の各概念と心理療法の関係が論じられる。

第6章では西洋において心理学が教育に活かされてきた実績を踏まえ、教育学を専門とする著者により仏教思想とそれを基にした人間観が教育相談の現場に資することが考察される。

第7章では高齢者医療の現場に携わる著者が、現代日本の喫緊の課題である老いを豊富なデータと実務経験から分析し、生老病死の各観点から読者夫々に自身の将来を惟みるよう促す。

各章の著者が持つ豊富な知識と経験、そして厚く蓄積された仏教と心理学の知見が融合した本書を、現代社会で聞・思・修に励む全ての人に是非読んでいただきたい。

(2) 大住 誠 篇著「瞑想箱庭療法の理論と実践」 論創社 2025 年 4 月刊行予定

大住 誠 (大住心理相談室)

編著者は、心理療法における副作用にもなりかねない「心への侵襲性を如何に少なくするか」に努めてまいりました。そのための技法の工夫やセラピストの態度などについてはすでに従来の心理療法においても様々な試みがなされております。筆者の身近では、来談者中心療法の理論、技法に則りつつも仏教的なカウンセリングを実施している真宗大谷派では「援助者と非援助者という関係性ではなく、援助しながら互いに成長しあえる「鏡の関係」でであっていくということに重きを置いております。そこでは「相談者の問題の解決ということが援助の主たる目的ではなく、凡夫である私たちの支援は『自利利他円満』で

しかなりたない。」(ココロ、ダイヤル)といったことが掲げられております。本書ではこのような一般的な試みに対して、あえて「同じ道を二人で行くな。犀のごとく一人いけ」という仏陀の教えを拠り所にして、「対自的關係性」に重点を置いた療法を紹介いたします。

ここで行う方法はセラピストがクライアントとの関係を極力少なくすべく、双方が同時に一定時間瞑想して、やがてクライアントが一人遊びとしての「箱庭療法」を実践するというものです。セラピストとクライアントとの対話は少ないのですが、瞑想と「箱庭療法」という遊びを通して、互が「心の深層」に降りていき、そこでシンクロしあうことで、セラピストがクライアントを一方向的に操作しないばかりでなく、クライアントが自律的に自身をコントロールすることもなく、セラピストとクライアントとが融合した状態で自然の流れのなかで「癒し」と「気づき」を成立させていきます。筆者は以上の体験を「勧誘空間」(瞑想空間)内での「布置の体験」「サトルボディの体験」「象徴体験」の3つの側面から説明します。そして、こうした考え方の源流を河合隼雄氏の「自然モデル」、荘子の「万物斉同」、ユング心理学、井筒俊彦の「意識の構造論」森田正馬の「あるがまま」などを参考に論じます。

本書の内容は以上の「瞑想箱庭療法」の理論の紹介とそれを実践している臨床心理士、公認心理師、精神科医、音楽療法家等の実践事例報告やクライアント自身の体験報告、瞑想箱庭療法の理論的検討、脳科学的な仮説、統計学的な研究等です。

関心をお持ちになられたら是非一読してください。

- (3) 書籍紹介 『心理臨床における「あの世」のゆくえ』
石川勇一、鈴木康広、森岡正芳、井上ウィマラ 著、
春秋社 2024 年 9 月 (3,500 円＋税)

岩瀬真寿美 (日本仏教心理学会会員)

まずは、執筆者の一人である森岡氏による「まえがき」にあるように、「なぜ心理臨床において「あの世」なのか」。このことが読み進めるにつれ明快に理解できる書物である。本書は日本心理臨床学会における自主シンポジウム「心理臨床と仏教」と、仏教の季刊総合誌で展開された「心理臨床と仏教」の連続シンポジウムが下地となっているという。本書は二部構成であり、第一部は「それぞれの「あの世」談義」として、四章立てとなっている。

井上勇一氏の「第一章 あの世の体験」では、「誰かの心理相談を行っている

とき、いつでもある程度はあの世のことをすくなくともバックグラウンドとしては意識しています」(5 頁)という記述があり、ご尊父の死を巡る体験における夢の重要性やブラジルの奥アマゾンのシャーマン体験について述べられ、あの世を意識する意味が読者にとっても納得できる内容であった。

鈴木氏の「第二章 「たましい」についてのユング派的考察」では、「ユングによれば、死者は存命中に自身が果たせなかった課題を生者に託しており、われわれ生者はその課題を果たすよう死者に求められている」(27 頁)という記述が印象的であり、また、現今の時代精神に表われるような影のイメージへの向き合い方についても教えてくれる内容であった。

森岡氏の「第三章 他界の危機と回復」では、現代の問題として、「他界とこの世とのバランスが壊れてしまった」ことが指摘され(72 頁)、「心の危機の問題の基盤に他界の危機がある。心理療法の仕事はシャーマンと類似する。その仕事はともに、この世とあの世の往還を助けることである」と論じられていた(72 頁)。現世に他界が顔を出す、他界を現世が取り込む社会的な仕組み(77 頁)の意義を知ることができた。

井上ウィマラ氏の「第四章 あの世とこの世を共に生きる道」においては、「あの世」「この世」という二元論的な世界の見え方を超えることが、「ブッダの言う無我や空を体現した心の保ち方」である(119-120 頁)ことを学ぶことができた。

以上が前半部であり、第二部「ディスカッションを終えて」として、第五章から第八章まで本書の後編が構成されている。心理臨床分野において新たな視角を提供された画期的な書物であると感じた。

編集後記

仏教と心理学の関係性に関する様々な考察を学ぶ中、立ち返って、明治期から昭和に生きた日本の仏教者である鈴木大拙が、宗教と科学について、どのようなことを考えていたかを少し辿ってみました。大拙の雑集二(昭和 23 年(1948 年))では、次のように述べられています。科学は「人間を抽象化、機械化、組織化」する。「一つの統制によって一つの組織によって世界を支配して行く」。一方、宗教は「それを自分の身で体験する」「個人というものが中心になって、そうしてそれから世界を見て行く」「宗教の世界では、すべてが個人をもって個人を中心にして、それから万事をさばいて行く」といいます(『鈴木大拙全集』第二十八巻、495 頁、引用における歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに直した。以下同様)。具体例を以下のように示しています(同書、496 頁)。

「昔、偉い坊さんがおって、その坊さんのところへある年寄った女の人がやって来ていうには、

「私は女性であって・・・・・・まあ女というものは昔から色々な障りがあるものといわれ、それが極楽に参るにはなかなかむずかしいことになっておりますが、それでも自分としては、この苦しみから逃れたいと思います。いかなる方法でもって、そういうことが可能となるでありますでしょうか。」ということ进行問うた。

その和尚がいうようには、

「それは何でもない。世間の人、すべての人はことごとく極楽浄土へ生まれてくれ。自分だけは地獄へでも、どこへでも行くということによいのだ。」と、こういうことを申したということですが、これなどは宗教でなければいうことができないものである。」

また、「科学」は物を生きた物とは見ない。「宗教」は物を生きた物と見る（1947（昭和22）年、雑集二、同書、460頁）とも述べています。さらに、知性に関して、「霊性的自覚という洗礼を受けてからの知性」は、「矛盾で行き詰まりに悩んでいる知性ではなくて、新たな生命を勝ち得た知性」とも述べています（『第一編 霊性的日本の建設』『鈴木大拙全集』第九巻、44頁）。

宗教と科学、霊性と知性に関して、大拙の著作から学んでいきたいと思ひます。

岩瀬 真寿美（同朋大学社会福祉学部）

今回は小泉八雲の「日本人の微笑」から印象深い一節を紹介したいと思ひます。
この一節は八雲が体験した京都のある夜の情景についてです。

「灯の明るい街を通り抜けながら、わたしは、非常に小さな寺の門前にある地蔵さまを見ようと思ひて、人混みをはなれた。それは寺の小僧一美しい童子の像であつた。そして微笑は、神々しいばかり真にせまっていた。じつと眺めていると、おおよそ十歳くらいの男の子が、わたしのそばへ駆け寄ってきて、像の前に小さな手を合わせると、頭を下げ、しばらく黙っておがんでいた。遊び仲間から抜けでてきたばかりで、まだ遊びの楽しさやほてりが顔に残っていた。

そして、無心な微笑は、不思議にも石像の童子の微笑にも似て、少年は地蔵の双子の兄弟のように思われた。」（日本人の微笑 1983年）

この一節を読んで、私は同じ情景を体験したことなどないのに、不思議とどこか懐かしく温かな雰囲気包まれ、それでいて何か切ないものも胸にこみあげてくる感じがしました。

お地蔵さまに手を合わせておがむこの無心の微笑の子ども。
前号の編集後記で紹介した武田鉄矢氏のエピソード「氷が融けると何になる？」という問いに「氷が融けると『春』になる」と答えた子どもに重なって見えたのでした。

『春になる』と答えた子どもも「無心の微笑」をしていたのではないだろうか。

私たちの胸にこみ上げてくるこの情感をもたらすもの—彼らの何気ない/無心の微笑
こそが、この子らのこころの豊かさの証に他ならないように思えます。

田邊 英一（臨床心理士、公認心理師）